

市制60周年記念事業
市報で見る
昭和の小金井写真展

日時

10月20日(土)～24日(水)

開催時間

午前10時～18時まで 最終日15時まで

場所

小金井 宮地楽器ホール



昭和46年武蔵小金井駅 南口踏切

昭和38年仙川増水時 給水風景



主催 小金井市・小金井史談会
平成30年度小金井市提案型協働事業

小金井史談会について

小金井史談会は市報昭和46年1月1日号に「市民の歴史発掘 小金井史談会へのおさそい」を初代会長の皆木重宏が呼びかけ同年発足しました。この時期は全国的に史談会ブームが興り、各所で史談会が発足しています。いらい史談会では小金井を中心とする武蔵野地域や東京並びに各地の民俗・風土を研究し、郷土愛と文化の向上に寄与することを目的として活動してきました。現在、毎月1回の歴史見学会を実施するほか講演会、展示会や石造物調査、古老への聞き取り調査、文化財の確認などを行い会員の親睦、友好を図っています。今回の写真展は市報を通して昭和の小金井を振り返る企画です。是非、写真展を通して小金井の移り変わりをご覧ください。

小金井史談会会長 池田十三雄

市報で見る昭和の小金井写真展趣旨

小金井市も市制施行から還暦を迎えました。この写真展では、市制施行から市報こがねいに掲載・発表された内容を中心に、昭和33年の市制施行から昭和64年までの小金井市の歴史を振り返っています。人口は市制施行前の昭和30年29,731人市制施行時の昭和33年36,931人でした。10年後の昭和40年には71,752人と一気に増加しています。昭和31年の経済白書で「もはや戦後ではない」と表現され、神武景気と表現された景気も昭和30年から始まっています。冷蔵庫・洗濯機・白黒テレビが三種の神器と言われたのもこのこの時代です。このように、日本の景気拡大が始まった時期が小金井市制施行の時期です。

このため、小金井の昭和史は景気の拡大、人口増加への対策としての道路・小中学校整備、ガス・上水道整備や中央線東小金井新駅開設や開かずの踏切対策、衛生的な近代化の基本である、下水道の完備、生ゴミをはじめとするごみ処理など、平成の現在から見ると当たり前の市民常識を順次構築・完成させていったのが、市制施行後の小金井市です。

昭和30年・40年代東京市部は人口増加率も全国平均よりも大きく、中央線の混雑率も京浜東北線のそれを遙かに超えていました。更に小金井市の場合、電車庫も完成し「始発駅」として、また新宿・東京へのアクセスの良さもあり、近隣の市に比べても人口増加ペースを遙かに超えていました。このように近隣市から比べても大きな変化があった時代です。この写真展ではこのような小金井の近代都市への変貌過程を改めて見て戴ければ幸いです。



1：市制施行前の小金井
(昭和30年)



2：ごみ収集(昭和39年)



3：市政施行記念写真
(昭和33年)

4：庶民金融としての
公益質屋(昭和33年)





5 : ドブ掃除 (昭和39年)

6 : 電車庫の完成 (昭和35年)



7 : あかずの踏切 (昭和39年)



8 : 武蔵小金井駅の混雑
(昭和38年)





9 : 公会堂の完成
(写真は昭和50年当時)

10 : たばこ消費税と
キャンペーン (昭和38年)



11 : 道路の舗装 (昭和33年)



12 : オリンピック
聖火ランナー
(昭和39年)



13 : 本町2丁目の洪水
(昭和41年)



14 : アメリカシロヒトリの駆除



15 : 市立全小・中学校にプール・
体育館完成 (昭和42年)



16 : 東小金井駅開業 (昭和43年当時)

17 : 五日市街道・玉川上水
歩道橋の完成 (昭和43年)



18 : 3億円事件逃走車両
本町住宅で発見
(昭和44年)

19 : 小金井最後の水田
(昭和45年)



20 : 中学校で学校給食
始まる (昭和47年)

2 1 : 野川・仙川の汚染
(昭和50年)



2 2 : 三宅島友好都市締結
(昭和53年)



2 3 : 放置自転車対策



2 4 : 玉川上水の変遷
(昭和55年)



25：江戸東京たてももの園
の開業（平成5年）

写真提供

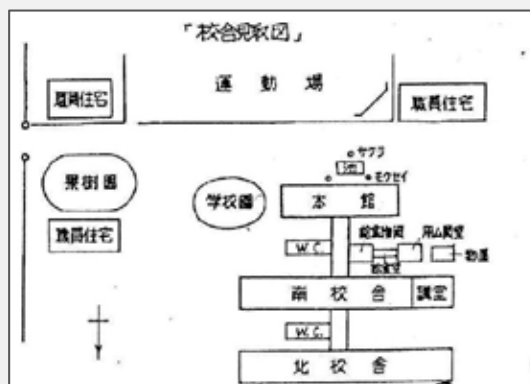
- | | | |
|------------------|-------|----------|
| 1：市制施行前の小金井 | 藤山晴彦氏 | 小金井第二小学校 |
| 25：江戸東京たてももの園の開業 | 秋葉欽司氏 | |
| その他：小金井市 | | |

写真年数表示は撮影年で表示

1：市制施行前の小金井

写真は昭和30年の二小航空写真です。

第二小学校は戦後陸軍科学技術研究所を進駐軍が占拠、大蔵省所管を経て地方公共団体へ貸し下げる事になり、当時国民学校の狭あい、二部事業の実施中から貸し下げを申請
小金井国民学校中部分教場として昭和21年4月より授業を始めました。また同時に
小金井青年学校（後の第一中学校）も移転
しました。翌22年学制改革から国民学校を
小学校に改称する事になり、町議会議決で
小金井第二小学校となりました。右は昭和28
年当時の見取り図です。北が下となっており、
写真とは逆になります。陸軍研究所時代の
建物を整備した状態の写真です。グラウンド
は昭和24年に畑から変更されました。



(小金井市立第二小学校20周年記念誌)

小金井町の時代最初の町報が発行されたのは、昭和26年8月25日創刊号です。この中で、昭和26年度の歳入：47,150,000円 歳出の中では結核予防費30,000円寄生虫駆除費113,000円など当時の状況が窺えます。世帯数と人口は5184世帯23640人でした。新町役場落成に際し当時の小川精一町長は学校建設が最も大きな財政負担であったが、どうしても本年度役場建設を済ませねばならない。と説明しています。

(町報昭和27年10月15日号)

また、昭和30年には昭和28年10月1日施行の「町村合併促進法」(次元立法)で施行3カ年経過後無効のとなる為、昭和30年9月30日限りとなると説明しています。当時2市3町案(武蔵野市、三鷹市、田無町、保谷町、小金井町)が議決されたりしています。(町報昭和30年1月15日号) この動きは、小金井町をはじめとする58町で陳情活動を行い、昭和33年4月5日付け官報布告で市政要件人口5万人から



緩和され小金井市制化へと
なりました。詳しくは、
小金井市史資料編 現代
第三章、高度成長・都市化の中
の小金井市 324頁から詳しく
書かれています。左は二小の
70周年記念写真です。
昭和30年の写真と比べると
差が分かります。

(小金井市立第二小学校提供)

2：ゴミ収集

写真は昭和39年のゴミ収集の写真です。

小金井市の家庭ゴミ収集・処理は昭和27年7月から町営となりました。当時は清掃車（リヤカー）7台で行っていました。処理方法は窪地での埋め立て処理。収集処理費（当時は塵芥清掃手数料）は一ヶ月30円。29年から委託事業となっていました。その後市の事業に再編入、現在は再度委託事業となっています。昭和27年当時はまだ定期的な収集は行われていません。昭和39年8月5日から衛生上の問題もあり、市内全域毎日収集になりました。写真はこの当時のものです。

内容は

1. 巡回車が鈴かオルゴールを鳴らして大体同じ時間帯に巡回。
2. 鈴の音が聞こえたら、台所のくずを持って収集車に投げ入れる。
3. 留守になる家庭、共稼ぎの家庭はかならずビニール袋に入れ
ゴミ箱に入れておく。
4. 手数料は一ヶ月50円。

（市報昭和39年8月5日号）

その後、ゴミ箱による収集、紙くずと台所ゴミ（生ゴミ）の別収集が行われ、大きく収集方法が変わったのは、昭和42年6月1日です。これは二枚橋のゴミ焼却場が完成し、焼却処理能力が大きく改善されたためです。

この時初めて紙袋を使用した、紙くずと台所ゴミの混合収集となりました。

右は二枚橋清掃工場写真です。



3：市制施行記念写真

写真は昭和33年10月5日商工連合会主催による仮装行列写真です。

場所は小金井街道南口の現在前原坂上交差点に近い場所です。

市制施行にあたり、市制問題説明会が小金井町と町議会主催で行われました。

（町報昭和33年4月15日号外）これに先立つ昭和31年、市となる要件が人口5万人以上であったため、要件緩和のための自治法改正が該当町に呼びかけられ、小金井町も加わり、昭和32年11月都で唯一の該当町である小金井町が中央機関と

関係町との連絡役となりました。

この経緯は町報昭和 33 年 4 月 15 日号外に詳細
が説明されています。右は總理府告示 312 号として
昭和 33 年 8 月 30 日に總理大臣岸信介名での発表です。

(市報昭和 33 年 9 月 15 日号) また市章の公募を 7 月に
行い、(町報昭和 33 年 7 月 10 日号) 9 月に決定しました。
応募数 274 点、審査は小金井在住の画家中村研一氏や、
本田正次氏、出沢沙河氏に依頼し、1 位に金沢市の
石田達朗氏が選ばれました。

總理府告示才三百十二号

町を市とする処分

地方自治法才八条才三項の規定により、
東京都北多摩郡小金井町を小金井市とす
る旨、東京都知事から届出があつた。
右の処分は、昭和三十三年十月一日から
その効力を生ずるものとする。

昭和三十三年八月三十日
内閣總理大臣 岸 信 介

(昭和 33 年 9 月 15 日号) また市制施行に合わせて 10 月 1 日
から 5 日に各場所で行事が行われています。

時代を表している行事は 10 月 3 日 11 時、産経時事新聞社の
祝賀飛行で「メッセージの投下」とあります。これは、当時
飛行機と地上の通信手段として「通信筒投下」が行われていた
ため、通信筒で祝電の代わりに投下されました。



月日	十月一日	十月二日	十月三日	十月四日	十月五日	十月六日	十月七日	十月八日	十月九日	十月十日	十月十一日	十月十二日	十月十三日	十月十四日	十月十五日	十月十六日	十月十七日	十月十八日	十月十九日	十月二十日	十月二十一日	十月二十二日	十月二十三日	十月二十四日	十月二十五日	十月二十六日	十月二十七日	十月二十八日	十月二十九日	十月三十日							
時刻	5時	5時	11時	7時	6時	2時	9時	11時	6時	6時	5時	5時	10時	6時	18時	0時	3時	9時	12時	9時	6時	3時	1時	5時	11時	11時	11時	4時	10時	12時	9時	6時	2時	10時	11時	10時	9時
場所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所	市役所
行事	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表	市章公募発表

4：庶民金融としての公益質屋

現在のような銀行のキャッシュディスプレイや、消費者ローンなどが発達する前、質屋が庶民の資金融通として利用されていました。小金井でも、小金井町時代に町営質屋が昭和 33 年 3 月開業しました。場所は小金井町役場移転後公民館となった横に、開業しています。写真で判るように、質屋の入口は公民館とは別に目立たぬよう、現在の連雀通りとは別の入口となっていました。

開設当時の利用状況は、2,221件、貸付総額3,424,300円で、ピークとなる昭和36年には4,242件 7,922,600円まで拡大しました。※1

開設案内の中で貸付上限：一世帯8千円以内。

(一般の質屋は2万円まで9分：9%)

貸付利息：1ヶ月3分(一般質屋は4ヶ月)

質物が困難なものの中には、「伝染病の感染するおそれのあるもの」という文面も

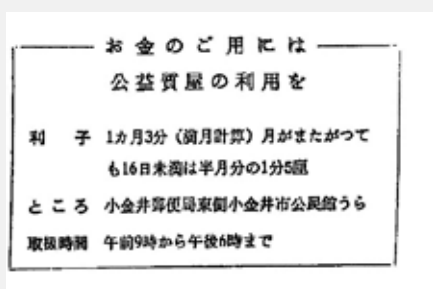
あり、当時の状況を反映しています。(小金井町報昭和33年3月15日版)



当時は庶民が一時的にお金を用立てる場合、質屋が一般的な方法でした。

上の写真は農工大通りでの消防訓練の様子ですが、左右の電柱の看板には質屋の看板が並んでおり、当時質屋の需要がいかに多かったかを伺うことが出来ます。

このような質屋も景気の回復や消費者金融の普及などで、件数が642件まで落ち込み、昭和55年4月に廃止されています。廃止に当たり小金井市では、5月から「緊急福祉資金」の貸付制度を発足させました。社会福祉協議会が市からの融資金200万円をもとに運営し、一時的な生活困窮者に限度5千円無利子となっていました。※2



市報昭和39年10月5日号にはこのような案内もありました。

※1 東京新聞 昭和53年11月6日

※2 産経新聞 昭和55年3月5日

5：ドブ掃除

写真は昭和39年小金井橋付近での側溝(ドブ)掃除の写真です。

当時多摩地区ではまだ下水道が無く、生活排水・雨水は側溝に流していました。

このため、定期的に地域で側溝(ドブ)掃除を行い排水路の維持を行っていました。

当時小金井市は急激に宅地化が進み、人口増加率を見てみると東京市部平均と比較すると、小金井 66.8% 市部平均 30.1% となっており極めて高い増加率である事が分かります。

(昭和 43 年小金井市誌地理編 201 頁) このため、洪水・野川の汚染・学校などのインフラ不足・駅の混雑と電車増発・開かずの踏切化・放置自転車・ゴミ処理・し尿処理・自動車通行量増加などが問題化しました。

小金井市では昭和 44 年から下水道工事に着手し 12 年かけて昭和 56 年に 100% 完成しました。

44 年開始当時の発表では総額約

55 億円と紹介し、受益者負担制度

で負担金は実施地区

の住民が負担としています。最終的には 177 億円。

(市報昭和 56 年 10 月 5 日号)

また、受益者負担制度を採用する事で

国や都から支援を受ける事が出来る事。この割合は

国庫補助金約 30%、都補助約 22%、市費約 30%、受益者負担約 18% となっていました。

(市報昭和 44 年 2 月 21 日号：臨時号) 下水道が最初に完備したのは昭和 48 年です。当時の市報では「おまちどおさま 便所を水洗に出来ます」の表題と、本町 1・6 丁目など市内面積の 20% が可能に。(市報昭和 48 年 6 月 10 日 特集公共下水道と便所の水洗化) と

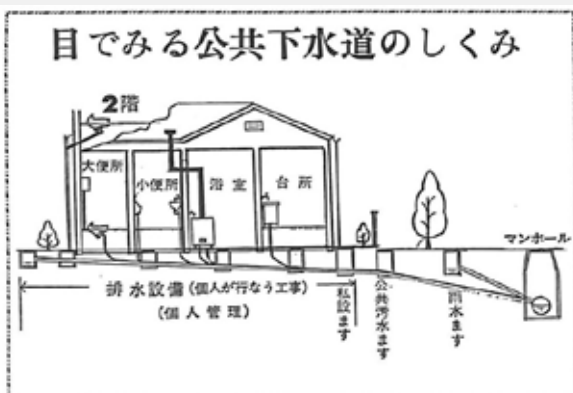


表 55 小金井市と東京都各地区の人口増加率の比較

地域	a 昭和35年 人口	b 昭和40年 人口	c (b-a) 35~40年 増加数	d (c/a×100) 同左増加率	e (d/5) 年平均 増加率
小金井市	45,734	76,323	30,589	66.8	13.3
全 都	9,683,802	10,869,244	1,185,442	10.9	2.2
区 部	8,310,027	8,893,094	583,067	6.6	1.3
市 部	1,012,719	1,448,006	435,287	30.1	6.0

資料：国勢調査。

発表しています。左の図は同市報での下水道の説明です。またこの号では、該当区域の方は 3 年以内に便所の水洗化を。と水洗の期限を周知しています。

100% 完成を報じる市報では、全市域設置は多摩 26 市中 4 番目、玉川上水北側は処理場の関係から 60 年までは家庭用雑排水・雨水のみ。水洗化で快適な市民生活に大きく寄与とうたっています。

(市報昭和 56 年 10 月 5 日号) パネル写真では小金井名画座のポスター「夫が見た」が見えます。これは昭和 39 年のサスペンス映画で、若尾文子・田宮二郎・川崎敬三・岸田今日子が出ていました。今見ると、中身より高度成長時代の生活が窺える映画です。当時の高度成長期の生活を垣間見るには面白い映画かもしれません。

6：電車庫の完成

写真は市報昭和 35 年 10 月 1 日号に載った完成後の電車庫の写真です。
電車庫は昭和 34 年 9 月 1 日に完成しました。高度成長が始まると小金井市も
含めた中央線沿線でも人口が急激に増加し、昭和 35 年の調査では中央線新宿方向の
快速線ラッシュ時の平均混雑率は 279% で当時の京浜東北線の 2 倍近い数字でした。
当時の国鉄としても対策を取りだしています。※1.1

1. 電車の能力アップ 昭和 32 年モハ 90 系（後の 101 系オレンジ色中央線の導入）※2
2. 編成車両の大型化 三鷹までの 10 両編成を延長。※2
3. 編成車両数の増加と運行本数の増加。※1.2

車両数を増加させる基礎として、電車庫の拡充が行われました。この増強計画の一環
として小金井電車庫が昭和 34 年に作られました。特に運行車両編成数と運行本数の増加
対策で、小金井市の状況としては開かずの踏切状態となりました。

またこの時期には

緑町の公団住宅（昭和 35 年 5 月 15 日入居完了）

警視庁自動車運転免許試験場（昭和 33 年 8 月 4 日事務開始）

小金井電話局開局（昭和 36 年）で小金井のすべての電話がダイヤル式へ。

他に、教育施設の拡充。浄水場の増設など、東小金井駅設置決定もこの時期です。

右の写真は昭和 47 年武蔵小金井駅踏切です。

当時まだ北口小金井街道右側に踏切番の
建物が見えます。手で駅踏切の開閉を
行っていました。



※1.1 首都圏通勤路線研究会編 主権通勤
路線網はどのように作られたか 87 頁

※2 日本経済評論社 多摩の鉄道百年 175 頁

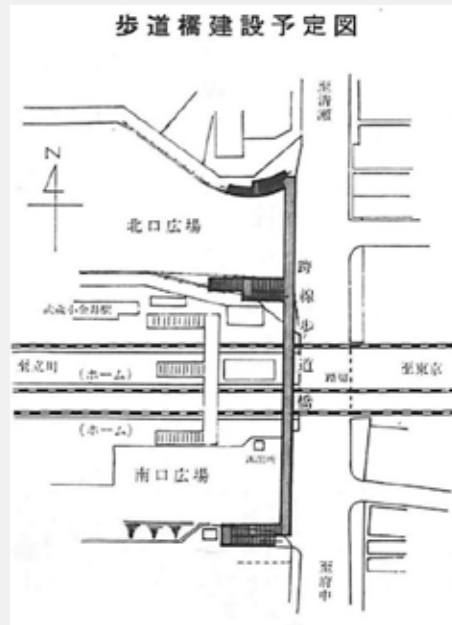
※1.2 首都圏通勤路線研究会編 主権通勤路線網はどのように作られたか 86 頁

7：あかずの踏切

写真は昭和 38 年から 39 年の武蔵小金井駅南口の写真です。
ベッドタウンとして多摩地区の人口増加に対応するため、車両を 10 両編成に増加
や、運行本数の増便などの対応が順次取られて過密ダイヤ化されていきました。
写真では当時南口商店街の歩道が、まだ東側のみの状況がみえます。
この歩道は、駅前商店街東側各店舗が独自費用で店舗をセットバックし、歩道を建設
したものです。

当時の国鉄ダイヤ増加の影響から、武蔵小金井駅東横を通る小金井街道は渋滞し大きな市民の問題となっていました。現実に市民生活は、中央線を挟んで南北に分断されていました。昭和46年3月20日の市報では「ラッシュ時には、一時間に三十秒しか開かないこともあり、“あかずの踏切”という悪評をこうむるなど、皆さんの市民生活に重大な支障をきたしているのが現状です。」と歩道橋建設計画の発表記事に書かれています。この歩道橋は小金井街道が都道として東京都が管理しているので、東京都と国鉄の事業として進められました。自動車に対する対策として新小金井街道建設と立体交差化も計画・建設されました。

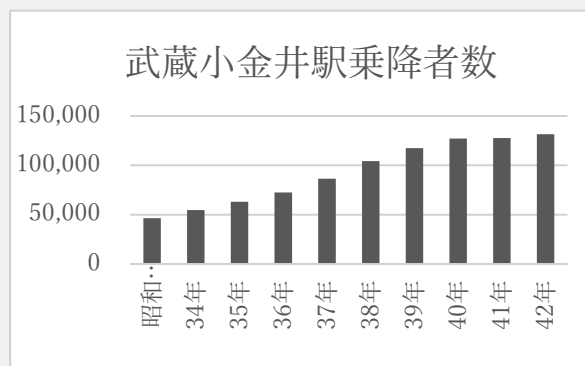
このあかずの踏切は中央線の高架化完成で解消されました。

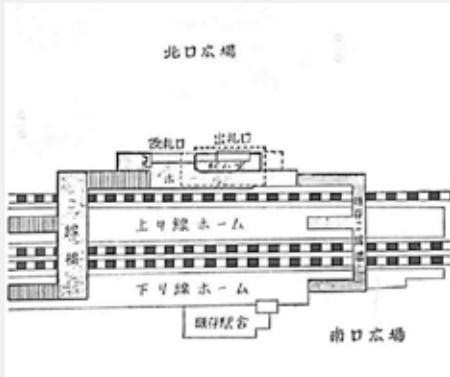


左の写真は平成6年10月1日、小金井街道北口踏切から南口を写した写真です。小金井街道両側にアーケード、歩道橋階段横に交番があります。正面のマンションはまだ建設中です。

8：武蔵小金井駅の混雑

写真は昭和38年9月24日市報の写真です。武蔵小金井駅の乗降客数は昭和39年には11万人を越え、昭和33年と比べると253%の増加となります。小金井のベッドタウン化により昭和37年から利用者が急激に増えました。これは市の人口増加とともに、周辺市からのバス路線が充実していた事も影響しています。





さらに武蔵小金井駅は電車庫の完成による始発電車
運転開始も影響しています。

このため、それまで駅は構内跨線橋が一カ所で混雑の
原因ともなっていました。 現状から市としても国鉄
に対して、駅の拡張や改札口の増設、跨線橋の増設を
要望し北口改札の移動と跨線橋の増設が行われる
事になりました。そのほか、ホームの拡張・昭和 33 年
から中央線用に設計されたオレンジ色の電車(90系、

後の 101 系) の投入なども進められ
ました。※ 昭和 35 年秋から
終日 10 両編成化も行われています。
右の航空写真は昭和 43 年当時の写真
です。写真左側の跨線橋が拡張された
跨線橋です。北口にはまだ
長崎屋(当時)が移転していません。
※中央線街と駅の 120 年
三好好三 編著



9 : 公会堂の完成

公会堂建設は昭和 33 年市政施行以来計画されていて、国民年金還元融資
5 千万円をうけ、総額約 1 億円で現在のイトーヨーカ堂西側に、総面積
2,230 m²で作られました。写真は昭和 38 年 10 月の完成からは時間がすこし
経っていますが、昭和 50 年市役所横にあった消防署火の見櫓からの写真です。
公会堂の北側中央線を越えた所に、小金井市商工会館・市民会館のビルが見えますが、
公会堂の東側、北側はまだ駐車場であったことが窺えます。

公会堂完成によって、成人式をはじめとする行事やテレビの収録番組、映画会などに
使用されました。成人式は完成前には第一小学校講堂で行われていました。
さらにそれ以前、小金井町の時代から町役場の会議室で行われていました。

成人式の会場としては以下のように変わっています。

昭和 35 年まで：市役所会議室(町役場会議室)

昭和 37 年～38 年：第一小学校体育館

昭和 39 年から：公会堂

完成した公会堂は会議室4室
大ホールがあり、当時の利用
料金はこのような金額です。
北口の市民会館と公会堂会議室
は各市民団体の活動でも使用
されていました。

器具など使用のときは若干の使用料を徴収します
入場料を徴収する催し物のときは料金は別項が
かかります。

時間 室	午前	午後	夜間	昼間	昼夜	全日
	9時-12時	1時-5時	6時-10時	9時-5時	1時-10時	9時-22時
A会議室	1,500円	2,000円	2,500円	3,500円	4,500円	6,000円
B会議室	900	1,200	1,500	2,100	2,700	3,600
C会議室	2,400	3,200	4,000	5,600	7,200	9,600
D会議室	1,800	2,400	3,000	4,200	5,400	7,200
大ホール	7,500	10,000	15,000	17,500	25,000	32,000



市報昭和 36 年 4 月 5 日号に掲載された社会に巣立ってゆく
中学生への「社会に巣立つ青少年激励大会」の写真です。会場は
市役所大会議室で行われました。



市報昭和 37 年 2 月 5 日号に掲載された昭和 37 年成人式の写真
です。会場は一小体育館で 743 名の成人が集まりました。

このように、公会堂完成前は市役所の会議室や第一小学校
体育館で各行事が行われていました。

10：煙草消費税とキャンペーン

昭和 38 年の当時の日本専売公社（現日本たばこ産業：JT）煙草の売上促進キャンペーン
の巡回宣伝の写真です。昭和 38 年当時市内で小売店 58 軒、煙草 1 本あたり 35 銭 2 厘が
煙草消費税として市に納入されていました。これは市税総額の 6～7%にあたり、
当時の市報では、「学校の場合、木造校舎が十教室分も出来る計算です。これだけ煙草
消費税は貴重なもので、市民のタバコ消費はこれよりはるかに多いことと思います。
住みよく明るい小金井市にするため、タバコは市内では是非お求めください。」

（市報昭和 38 年 9 月 5 日号）など当時の市報
各号では「タバコは市内で買しましょう。」と
市内購入を促し、右のような武蔵野たばこ
商業組合のキャンペーンに後援したりも
していました。

（昭和 32 年 12 月 15 日号）

当時は不況で、たばこ消費税は重要な財源となっており、消費税は属地方

（買われた地区）で配分されるため、小金井以外でも各郊外の住宅街を持つ自治体は、
このような「たばこは市内で買しましょう」キャンペーンを広げていました。

これは勤め先で購入するサラリーマンが多いため、サラリーマンの勤務先が多い
地域に入る事になっていた為です。このキャンペーンに対し昼間人口の多い地域では、
夜間人口が少なく、ゴミ処理などの費用などを口実に反対していました。一方日本専売公社

**たばこ1個で
テレビが当る**

武蔵野たばこ商業協同組合主催、小金井市ほか3
市6町後援で、12月10日から1月5日まで たばこ
1個につき抽籤券一枚をさしあげます。
抽籤は 1月23日 吉祥寺 東映劇場で

タバコは いつも 小金井で

の「儲け」が専売納付金として国庫に入る大蔵省（当時）では、値上げなどで金額が振れる納付金から税への変更を考えました。このように国・昼間人口の大きな自治体・ベットタウンの有る自治体三つ巴の財源ぶんどりの争いがありました。



また市報昭和 39 年 10 月 5 日号には当時としては珍しいイラストつきで掲載されました。

1 1 : 道路の舗装化

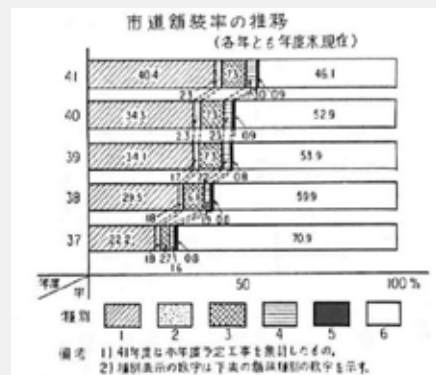
写真は昭和 38 年本町小西側の舗装前の写真です。小金井市では、昭和 30 年代より主な市道から舗装化を進めています。昭和 35 年には市報で「今までに完成した市道と都道などをあわせると、市の大体主要道路が舗装された事になります。来年度は二次主要道路の舗装をする計画であります。」

（市報昭和 35 年 1 月 7 日）と発表しています。都道は 5 路線で昭和 39 年度までに舗装工事は完了していました。市道の場合、舗装距離では 3 万 6 千 m 29.1%（昭和 37 年度末）となっていました。これは都道の場合幅員が 8～11 m で交通量が多く、東京都が前々から舗装を進めていたためです。（表 1 参照）

市道の場合、都道と同レベルの交通量がある幅員

路線番号	路線名	延長 (m)	巾員 (m)
都道 7 号線	五日市・杉並線(五日市街道)	1,506.0	10.0
〃 15 〃	府中・清瀬線(小金井街道)	3,246.0	10.0
〃 134 〃	恋ヶ窪新田・三鷹線	4,563.0	8.0
〃 135 〃	武蔵小金井停車場線	105.0	11.0
〃 136 〃	武蔵小金井停車場・貫井線	1,428.0	11.0
総延長		10,848.0m	いずれも舗装道路

路面巾員 (m)	延長 (m)
10 m 以上	4,934.0
8.5 m 以上	43.0
6.5 m 以上	4,495.0
小計	9,472.0
5.5 m 以上	10,980.0
4.5 m 以上	34,670.0
小計	45,650.0
3.5 m 以上	23,759.0
2.5 m 以上	25,205.0
小計	48,964.0
1.5 m 以上	22,285.0
合計	126,371.0



舗装種別	舗装延長 (m)	舗装率 (%)
1. 弾道式無骨乳剤舗装	43,429.9	34.3
2. 弾道式オイルサンド舗装	2,939.0	2.3
3. オイルサンドアスファルト舗装	9,161.0	7.3
4. アスファルトコンクリート舗装	2,944.1	2.3
5. コンクリート舗装	1,129.5	0.9
小計	59,603.5	47.1
6. 砂利道	66,767.6	52.9
総計	126,371.1	100

1 2 m の都市計画道路から、幅員 1. 8 m の農道まで入り、総延長 12 万 6 千 3 7 1 m もありました。（表 2 参照）このため、自動車がすれ違える 4.5 m 以上の道路総延長約 5 万 m（全市道の 43.6%）を重点的に舗装し、以降 4.5 m 以下の道路を自動車走行が可能な道路にする事を優先しました。昭和 41 年度には効率化のために、小型ダンプカーやシャベルローダーを購入・機械化し、それまでの砂利道補修時間を短縮し、舗装と維持管理に時間を割けるようにしました。（市報昭和 41 年 6 月 5 日号）

明治時代「貫井往還」といわれた現在の池の上通り

なども、当時道路の巾は大八車が通行出来る程度で問題なかった為です。また、舗装の種類も道路に合わせて5種類を使い分けていました。(昭和41年時点：表3参照)市報ではまた、「市内の七市道を一斉に簡易舗装」と案内しています。これは小金井市昭和42年の資料では舗装の基礎部分が5cm厚、アスファルトが3cmとなっています。国の基準と構成比では交通量が少なく、重車両が少ない。人家連担区間は側溝整備を条件としています。また簡易舗装は90%が市町村道です。

12：オリンピック聖火ランナー

写真は昭和39年10月2日に公会堂で行われた、「オリンピックを迎える七万人市民のつどい」での聖火ランナー激励です。これは公会堂会館1周年を記念してオリンピック前夜祭として行われました。聖火は10月8日に小金井を通過しました。

聖火リレーにあたり、

- ・16歳から20歳までの選手1チーム23名56名の地元選手
- ・小金井公園郷土館前で小平から引き継がれる
- ・郵便局前で中継、慶応大学工学部まで小金井街道をリレー
- ・実行委員会長(市長)などの人選が発表されました。

(市報昭和39年4月5日号)

5月にはリレー走者の募集発表(市報昭和39年5月5日号)、

6月に決定

走者が発表

され、(市報昭和39年6月5日号)

6月12日に走者の結団式(市報昭和39年7月5日号)がおこなわれました。そして

市報10月5日では、聖火を迎えるに当たっての沿道住民、商店、生徒を引率する先生等へ個別の注意事項を詳細に説明しています。右上は同市報に掲載



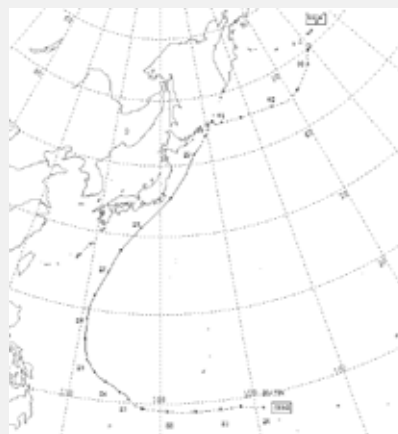
された聖火リレーコースです。左下は聖火通過当日の写真ですが残念ながら雨となりました。

13：本町2丁目の洪水(ビートルズ来日も遅らせた台風)

写真は昭和41年6月28日の台風4号による本町2丁目交差点洪水の写真です。この台風4号による被害は、激甚災害に指定されました。(制令288号、後に制令

294号に改正) 全国で浸水家屋は12万戸。この台風で日航412便も10時間遅れ、来日するビートルズの到着は29日午前3時40分となって多くのファンは出迎え出来ませんでした。

小金井でも写真のように洪水被害が出ています。このため、被害者にその程度に応じて41年度の個人の市民税、固定資産税、都市計画税、軽自動車税が減免される事になりました。(市報41年7月15日) またこの41年には台風26号でも洪水被害があり、同じく税の減免措置が執られています。さらにこの台風では高圧送電線停電により、市内ほとんどで断水もおきています。



この26号は関西24号、関東26号がほぼ同時に上陸という珍しい台風でした。右は台風4号の進路です。(気象庁台風経路図1966年より)

当時はまだ下水道が出来る前で道路横の側溝に流す状態でした。(ドブ掃除の写真参照下さい)、このため、写真の本町2丁目交差点でも排水出来ない雨水が窪地に溜まったり、野川・仙川流域で洪水が度々発生しました。このため市報でも「風水害にそなえよう」

(市報昭和43年7月5日号)「水害・火災の被害をなくそう」(市報昭和48年7月5日号)「河川や用水路の付近の方をお願い」(昭和44年9月20日号)等が案内されています。

また、仙川の水を野川に流す、仙川分水路工事も行われています。

(市報昭和48年7月20日号) このように台風による被害も下水道完備や河川改修で解消されてゆきました。このように下水道が完成した事で、洪水や野川の汚染などへの対策効果として現れました。

14：アメリカシロヒトリの駆除

写真は市報昭和42年7月5日号の表紙になっているアメリカシロヒトリ駆除の写真です。昭和40年代に入ると小金井市でも、桜や桑、プラタナスの木への対応が必要なほど発生が問題となりました。このため幼虫がふ化する季節になると、市報では「7月まで葉を食べ荒らしていた幼虫が蛾になり、卵を産むため幼虫となった8月から9月にかけて再び葉を食べ荒らすこととなります。」と注意を促しています。

対処法としては、卵からかえった幼虫は糸をはいて一カ所に集団で巣を作る事から、習性を利用して、

①成長する前に枝ごと巣を切り取って、焼き捨てる。市報昭和46年8月5日号

②①の他にさおに油布を付けて焼き殺す。市報昭和45年6月20日号

等の対処法を掲載しています。

当時公共施設に対しては市が防除作業を行うが、各家庭の樹木は原則個人対応。

木が高く駆除できない場合は市への相談を呼びかけています。

また、右の写真のように、それ以前から日本脳炎や赤痢・疫痢などの対策として、ハエや蚊の殺虫剤散布として粉末殺虫剤 DDT、BHC 散布を、側溝や草やぶにはスミチオンなどの乳剤散布を1ヶ月に2回行っていましたが、昭和40年代中旬にはこれら粉末殺虫剤の毒性が問題となり、昭和46年には



乳剤散布のみとなりました。散布にあたり「赤ちゃんのいる家庭や小鳥・金魚のいる家庭では散布当日に窓をしめるなどして薬が目にかからないよう、特に注意して下さい。」

(市報昭和45年6月20日号)と呼びかけています。さらに各家庭向けに乳剤配布も昭和50年代後半まで実施されました。



遡る昭和30年代後半、台湾からコレラの疑似感染者帰国の事件もあり、市としても消毒を行う対応方法も発表され、市議会でもコレラのワクチン確保の決議が行われています。(市報昭和37年8月28日号)

下水道が完備される前は日本脳炎・赤痢・疫痢などの防疫対策(当時は衛生対策と言っていました。)としての殺虫剤散布・配布も重要な対策でした。

15：市立全小・中学校にプール、体育館が完成

写真は昭和42年6月第二中学校でのプールの様子です。中央奥には当時の鴨下製糸工場の煙突が見えます。小金井ではこの年、本町小体育館と前原小プールが完成して当時の市立7小学校、3中学校でプールと体育館が完備されました。プールは小金井第一中学校を見てみると、市になる直前の昭和32年、町民と第一中学校PTAの協力で「学校プール建設会」が校庭に建設しました。そして建設会から小金井町に寄付され、教育委員会のもとに学校プール管理委員会(委員長1中校長)が管理する事になりました。

これは、学童、生徒(つまり小中学生)の水泳練習が中心ですが、夏休みは一般市民に開放されていました。当時の発表を見ると、

1. 町立小・中学校生と教職員、管理員会の許可を得た町民・町内勤務者。
2. 期間は8月3日～8月25日までの土曜午後と日曜。
3. 時間は日曜第一回：10時30分～12時など1時間30分ずつ。土曜2回、日曜3回
4. 使用料 一般10円 学童・6歳以下の子供5円

となっていました。(小金井町報昭和32年8月1日号)

そして昭和 32 年から一中プールを使用し体育祭の一環として水泳大会が開かれました。それまでは貫井プールで第一回都下水泳大会などが行われました。

(小金井町報 9 月 5 日号) 当時多摩地区は都下と表現していました。昭和 41 年の段階でも本町小が二小分校計画から独立し、校舎建設中に増築、三小は 6 教室、四小は 6 教室など学童数増加に合わせて、教室数を増やすことが優先されました。

(市報昭和 41 年 1 月 30 日号) 当時宅地化が進み人口



は急激に増加し、小・中学校をはじめ市内のインフラ整備が重要な位置を占めていました。左は昭和 36 年 6 月の第一小学校プール建設中の写真です。左奥に見える二階建て建物は当時の校舎写真です。

小金井市人口推移

	戸数	人口
35年	10,732	43,019
36年	13,375	46,647
37年	15,873	52,821
38年	17,680	58,715
39年	19,681	65,875
40年	22,117	71,752
41年	24,509	76,493
42年	26,403	79,555

16 : 東小金井駅開業

写真は昭和 43 年の航空写真です。

東小金井駅は市と地元住民の請願で進められた駅、中央線 31 番目の駅として昭和 39 年 9 月 10 日に営業が開始されました。

開発には駅前広場や道路などを開発するには多額の経費が必要な為、財団法人小金井市開発公社を申請。東京都からの承認を受け、新駅周辺整備を目的とした財団法人を発足させました。整備の苦労は東小金井駅開設記念会館として建てられたマロンホール入り口にある、東小金井駅開発記念碑に刻まれています。また、裏には新駅設置促進会役員名と財団法人設立に寄付した方の名前が刻まれています。寄附者総人数は 531 名。地元の多くの方の協力が有った事が窺えます。

同時に国鉄も中央線の複々線化工事に関連して、それまであった中野・荻窪・吉祥寺の貨物取扱を廃止し、これに変わる貨物駅として総工費 17 億円の予算で東小金井貨物駅の新設をすすめ、東小金井駅営業開始の翌年、昭和 40 年 4 月 5 日開会式を行いました。主要輸送品目であった自動車生産を取り巻く環境が大きく変わり、昭和 59 年 12 月 1 日に取扱を中止しました。





開業当時の東小金井駅

乗降客数

昭和 39 年 11,381 名（営業開始 9 月 10 日以降）

昭和 40 年 28,685 名

となっています。

駅営業開始前は東町・梶野町・関野町などの方は、武蔵小金井駅より武蔵境駅を利用していたとの事です。

17：五日市街道・玉川上水歩道橋の完成

写真は昭和 43 年五日市街道と玉川上水をまたぐ歩道橋完成時の写真です。当時、玉川上水に架かる橋は新小金井橋と関野橋の間には有りませんでした。同地域の五日市街道には、信号もありませんでした。昭和 43 年に関野橋横に横断歩道・信号がやっと設置され、市報昭和 43 年 2 月 5 日号には「五日市街道に待望の信号機」と写真付きで報じています。五日市街道は戦後進駐軍が道路拡張を行いました。この時玉川上水沿いの桜も伐採され、現在のように上水の南側だけとなりました。写真でも、直線の道路の先まで信号がない様子が窺えます。

右は昭和 30 年アトラス社地図を

昭和 53 年小金井市誌 V 地名編

で復刻した付録地図の一部です。

小金井公園正門近くで

玉川上水を横断する橋が無く、

当時新小金井橋から関野橋まで迂回

する必要がありました。地図では旧住所として、現緑町 3 丁目が小金井

新田と表示されています。中央下には「山の神」の祠があります。



五日市街道は小金井地区では直線となっており、交通事故も度々発生して、五日市街道沿いにある桜樹接種碑（関野町）にトラックがぶつかり、碑が玉川上水に落ちる事故もありました。なお小金井市最初の歩道橋は市立第三小学校北側北大通りの歩道橋です。昭和 41 年 3 月 31 日完成しています。また、新小金井橋（昭和 41 年 6 月 5 日）関野橋（昭和 41 年 3 月 15 日）もほぼ同時期に現在のコンクリート製となりました。

18：3 億円事件逃走車両本町住宅で発見

写真は昭和 44 年 4 月 9 日犯人が、現金輸送車から乗り換えた車が 4 ヶ月後に

本町住宅の駐車場で見つかった時の写真です。

事件は昭和 43 年 12 月 10 日、東芝府中工場のボーナスを銀行から運搬途中に強奪されました。当日の新聞夕刊は各社ともこの事件が 1 面トップとなっています。表題だけでも事件の内容が分かります。朝日新聞記事では「現金輸送車の 3 億円奪う」「警官装い、車ごと」「国分寺で乗り換え逃走」「東芝工場のボーナス」「白バイ隊員と思った」「危ない！車に爆薬が」「警官スタイルの犯人行員らを遠ざける」「6 日、銀行に脅迫状」※ 1

と週刊誌の広告的な見出しが踊っています。それまでの強盗事件の最大額が 3100 万円（昭和 40 年 9 月 30 日青森銀行弘前支店前での強奪）が最高額でした。

この後、昭和 44 年 4 月 9 日に小金井本町住宅駐車場で乗り換え逃走に使ったカローラが発見されました。この時も発見当日の夕刊一面に大きく報道されました。右はそのときの紙面です。この時の報道では「9 日午前 11 時 20 分ごろ、現場に近い小金井市本町 4 ノ 8 本町の東京都住宅供給公社の住宅 B 1 号館西側の空き地で見つかった」※ 2 と出ています。現在の常識では考えられないほど詳細に場所が出ており、当時の感覚が分かります。

写真が小さいですが、当時の上空から見た本町住宅周辺が分かります。

当時もう一つ大きな話題として川端康成がノーベル文学賞を受賞し、授賞式が 10 日（日本時間 11 日午前 0 時半）にあり、授賞式のスピーチ「美しい日本のわたし」が評判となりました。また当時の広告を見ると、歳暮商戦として「サントリーレッド 2 本、グラス 2 個詰め合わせ」¥1,000 円が出ています。



※ 1 朝日新聞 昭和 43 年 12 月 10 日夕刊

※ 2 朝日新聞 昭和 44 年

19 : 小金井最後の水田

写真は小金井最後の水田の風景で、昭和 45 年 6 月 5 日最後の田植えです。小金井の水田は宅地化が進んだ事もあり、次第に無くなり、最後にこの野川周辺の約 5 ヘクタールが残りました。この水田は、度々洪水が有った野川の改修工事のため、閉田となる事になり、最後の田植えが行われました。これを記念して昭和 46 年 9 月に現在のみはらし坂近くに「小金井水田跡」碑が建てられ、寛永 12 年（1635 年）からの

水田面積の推移が刻まれています。内容は、「小金井市の資料によると

寛永 十二年（西暦一六三五年） 十三ヘクタール

享保 九年（西暦一七二八年） 二十ヘクタール

明治 十三年（西暦一八八〇年） 三十六ヘクタール

明治二十三年（西暦一八九〇年） 四十九ヘクタール

大正 十三年（西暦一九二四年） 二十七ヘクタール

昭和四十三年（西暦一九六八年） 七ヘクタール」

となっています。

また、この下には、靱を入れたタイムカプセルが納められています。

昔の野川は右の写真のように蛇行してました。

最終的に洪水対策として拡幅と蛇行を修正し、

調整池が作られました。現在水田跡は調整池になって

います。またこの工事に先立ち、この野川周辺にある

遺跡の調査も行われました。ここでは丸木橋状遺構や

漆塗り櫛なども出土して注目を集めました。

またこの遺跡からは板碑片も3片出土しており、遺構は

近世まで使用されていたと考えられています。（武蔵野公園低湿地遺跡報告書）



20：中学校で学校給食始まる

写真は昭和47年東中学校で始まった学校給食の写真です。

小学校の学校給食は始まっていましたが、中学校の給食は写真の昭和47年1月20日

からの実施となりました。初日の献立はメンチカツ、カレーシチュー、牛乳1本、

パン二切れ、リンゴ半分でした。また給食開始に先行して、

前日の1月19日にはPTA、学校関係者、市関係者の試食会も

行われました。現在では、給食に対する考え方も変わり

平成21年に学校給食法が改定され、法の目的に「学校における

食育の推進」も加わりました。詳しくは小金井市教育委員会

学務課「小金井市学校給食の指針 安全でおいしく温かい

給食」で説明されています。この昭和47年市内では、

市立緑中学校が4月5日4番目の中学校として開校し、

5月20日小金井公園弓道場開場、

12月28日には武蔵小金井駅東側の歩道橋、が完成しています。事件としては、4月21日

武蔵小金井駅トイレで鉄パイプ爆弾爆発の事件がありました。当時の世相としては、

札幌オリンピック開催（9月にはミュンヘンオリンピックテロ）、連合赤軍あさま山荘事件、

有吉佐和子の小説「恍惚の人」、テレビアニメでマジンガーZ、ガッチャマンなどが放映



開始、歌謡曲では瀬戸の花嫁（小柳ルミ子）・旅の宿（よしだたくろう）などがヒットしています。また、10月28日中国からはじめてジャイアントパンダ（カンカン、ランラン）が上野動物園に着いたのもこの時期です。

21：野川・仙川の汚染

写真は昭和50年市報に掲載された野川の汚染を訴える写真です。

野川・仙川とも都市化が進み、下水道整備が間に合わない状態となり、水質悪化が問題となりました。昭和47年小金井市の水質調査結果でも重金属や農薬の汚染は確認されず汚染は家庭排水が原因で有事が確認されました。（市報昭和48年4月5日号）汚染は昭和52・53年がピークとなり汚染評価の基準となるBOD（生物化学的酸素要求量）が増加しドブ川となりました。※1しかし下水道整備が進み生活排水と水洗化が進んだ事で（野川昭和55年 仙川54年）、改善が見られるようになりました。右の図は下水道の完成年度を示した下水道完成図です。



（市報昭和56年10月5日号）ただし、仙川は小平上水南町の源流の一分が枯れ、水量が激減。野川は国分寺市の下水道化が遅れた事により、完全な復活はさらに遅れました。仙川は空堀化から最終的には部分暗渠となりました。

小金井市の公共下水道完成は多摩26市中4番目

（三鷹、武蔵野、狛江、小金井の順：市報昭和56年3月20日号）

さらに「公共下水道既設区域の皆さんへ」として水洗義務化期限の周知を行っています。

（市報昭和51年4月20日号）

また、市報では「最近心ない人が川の中にゴミを投げ捨てたり、イヌ、ネコなどの動物の死体を投げ込んだりしています。皆様のご協力をお願いします」と野川・仙川にゴミを捨てないでキャンペーンを行っています。昭和52年野川流域住民で多摩川清掃に参加した人から、「多摩川の浄化は支流の野川から」と浄化実行委員を結成したり鯉などの放流も行われるようになりました。※2

このように小金井を含めた野川流域の下水道推進と住民の努力で現在のような市民憩いの川を取り戻せるまでになりました。

※1 読売新聞昭和52年6月8日

※2 東京新聞昭和53年2月28日

22：三宅島友好都市締結

写真は市政施行二〇周年を記念して三宅島との友好都市締結式の写真です。昭和53年10月1日公会堂で行われた三宅島—小金井友好都市締結式での当時の三宅村大沼良三村長と小金井市永利友喜市長の署名風景です。締結後三宅村郷土芸能が上演されました。友好都市締結前にも市民指定の保養所がありました。三宅島との交流は安政年間に小金井小次郎が三宅島に流刑となった際、小金井小次郎の井戸など功績を残した事が縁で、保養所建設運動など交流が進んで来ました。この中で市政20周年の目玉事業として友好都市締結協議を経て、10月1日の締結式となりました。

(市報昭和53年10月1日号) また10月6日～8日には市民・市代表団が三宅島を訪問し、郷土芸能館まつり会場で友好都市提携記念式典が行われました。

また昭和54年4月に締結を記念する石碑を両者が建てました。三宅島は役場前に花崗岩で、小金井市は滄浪泉園に、同じ盟約文を彫った碑を建てました。小金井の碑は三宅島の輪郭をかたどった銅板が付けられています。日付は締結式が行われた昭和53年10月1日となっています。右は滄浪泉園記念碑の写真です。

碑文は以下となります。

友好都市記念碑

緑豊かな文化都市をめざす多摩の小金井市と自然美あふれる豊かな島づくりをめざす伊豆七島の三宅島は人と自然の調和あるまちづくりと歴史的ゆかりを共通のきずなとして相互の交流を盛んにし理解と親善を深め両自治体住民の福祉向上のため友好自治体になることを盟約します。



昭和五十三年十月一日
小金井市長 永利友喜
三宅 村長 大沼良三

23：放置自転車対策

写真は昭和56年武蔵小金井駅北口の放置自転車の写真です。ベッドタウン化が駅から遠い地域にも進むと、駅までの移動手段として自転車を利用し、

駅の周りに自転車を置いて電車を利用する人が多くなりました。

このため駅前も通行もままならない程の状況となり、昭和 55 年 9 月に市政にのぞむ事のアンケートトップが放置自転車対策となるほど、大きな問題となりました。

これは小金井市だけではなく、宅地化が進んだ地域特に首都圏では大きな問題となりました。武蔵野市でも昭和 56 年には乗り入れ地域と時間帯確認の動態調査も行われました。結果は武蔵野市民の自転車は 20%前後、他は練馬、三鷹、保谷、田無など隣接地域からの乗り入れが多い事も判明しました。小金井市でも駐輪場確保を進め、迂余曲折はありましたが、市内 3 駅周辺に駐輪場開設を進めました。昭和 53 年には国会でも超党派立法で新駅には駐輪場設置を義務づける「自転車法」が検討されました。小金井市でも宅地開発指導要綱にならった、自転車要綱も検討されていました。

これは強制的に放置自転車を撤去する内容でした。

市報でも

- ・「近距離の人は歩きましょう」（昭和 53 年 6 月 20 日号）
- ・「1 k m以内の人は歩きましょう あなたの健康のためにも」（昭和 56 年 7 月 5 日号）

など通勤通学を中心に近距離の人に向けたキャンペーンも展開しました。現在は

1. 市内駐輪場の整備。
2. 放置自転車撤去。
3. レンタサイクル。

などの効果が出ています。

右は昭和 56 年 7 月 5 日の市報に掲載された市内 3 駅から 1 k m圏内を表したものです。多量の自転車をバックにしたレイアウトが当時の深刻さを物語っています。



24：玉川上水の変遷

写真は昭和 55 年 2 月 22 日の玉川上水です。新小金井橋から上流に向かって撮影しています。玉川上水は承応 3 年 6 月 20 日に完成してから江戸・東京の飲料水また灌漑用水として、重要な位置を占めてきました。また新宿の淀橋浄水場への原水導水路となっていたのですが、昭和 40 年 3 月新宿副都心建設のため、淀橋浄水場は東村山浄水場に移転し、写真のように空堀状態が続いていました。

このため玉川上水は暗渠化が進み、空堀状態の区間でも土手が崩れ「なし崩し的に破壊が進んでいる。」事から、昭和 55 年に三鷹・武蔵野・小平の自然保護 5 団体が連絡会を開いた事を契機に清流を取り戻す方向に動き出しました。※ 1

東京都は翌 56 年に三鷹駅北口から櫛橋間 125m の暗渠化に対して、暗渠の上に境浄水場からポンプ循環で清流を流す事にしました。※2

昭和 57 年 6 月 22 日東京都は一日 3 万トンの水を流して清流を復活させ、国の史跡指定を受けて現状のままの姿で残す事を決めました。先行して野火止用水で工事が進められました。※3 さらに昭和 59 年には野火止用水を視察した当時の原環境庁長官に対して、当時の鈴木都知事は玉川上水下流も流を復活させる事を明らかにしました。※4

最終的に昭和 61 年 7 月 15 日から昭島の通水処理場の下水 2 次処理水を砂濾過し試験通水、8 月 27 日から正式通水が行われ現在の姿となりました。

また市報では、「本格通水が開始されますと、危険ですから上水路には絶対に入らないで下さい。また通水に支障をきたしますので、空き缶や空き瓶、ゴミは捨てないようにして下さい。」(昭和 61 年 8 月 5 日号) と注意を促しています。また空堀化した期間に上水には櫛などが生い茂り、「武蔵野の面影」と勘違いされた時期もありました。現在は住民・市・東京都の努力で昔の玉川堤の桜も復活しつつあります。また 20 年にわたる空堀状態で、水路の底に 20 種類以上の珍しい野草が有ったため、通水にあたり市民グループが土手に移植を進めました。(市報昭和 61 年 8 月 5 日号)



右の写真は昭和 40 年の玉川上水の写真です。

※1 昭和 55 年 12 月 12 日 読売新聞

※2 昭和 56 年 9 月 1 日 読売新聞

※3 昭和 57 年 6 月 24 日 朝日新聞

※4 昭和 59 年 8 月 25 日 朝日新聞

25 : 江戸東京たてもの園の開園

写真は平成 5 年 4 月 12 日の江戸東京たてもの園開館披露の会の写真です。

昭和 57 年 11 月東京都から江戸東京博物館の建設構想が発表されました。

この発表前には、前身の武蔵野郷土館に対し学芸員ゼロや企画展開催が年一回の現状から歴史学者や郷土史研究家から改善要求が出ていました。※1

公式発表前後からは誘致活動が動き出し、これ以降小金井でも誘致に向けた活動が始まりました。民間では昭和 58 年 6 月「小金井公園に江戸東京博物館を誘致する会」が発足し、誘致活動が開始されました。

写真は右からメンバーの秋葉欽司氏、大久保重利氏、清水角治氏、皆木茂氏、鈴木紀男氏

です。(写真提供 秋葉欽司氏) 平行して市議会でも3月30日に東京都知事宛に意見書が採択されました。※2

また、昭和57年7月に東京都長期計画懇談会の席上で都知事に対して「東京のほぼ中心に位置し都心からも交通の便のよい都立小金井公園に江戸東京博物館を設置してほしい」と要望しました。(市報小金井昭和58年3月5日号) またこの中では、小金井公園に江戸東京博物館を誘致する会が結成された事も紹介し、「市民の力で江戸東京博物館を小金井に誘致しましょう」と市民全体で誘致する事をアピールしています。昭和58年当時2万7千人の署名を集め都議会や市議会に請願、懸垂幕の提出、市内各団体への協賛依頼など誘致運動の幅を広げています。(市報小金井昭和58年5月20日号) 当時7地区が名乗りを上げていました。(小金井公園の他に砧公園・駒沢公園・水元公園・上野公園・木場公園・辰巳の森海浜公園が候補地となっています。) 前述した民間の小金井公園に江戸東京博物館を誘致する会ではその後も、多摩地区全議長会、東京都所管部局・議会事務局に要望書を提出するなどの活動を行いました。このように当時としても珍しい、市長・市議会・市民が一体となった誘致活動の結果、分館として江戸東京たてもの園が会館しました。

右の写真は江戸東京たてもの園開館披露の会の当時の鈴木俊一都知事と大久保慎一市長です。(写真提供 秋葉欽司氏)



※1 昭和57年6月24日 朝日新聞

※2 昭和58年3月31日 読売新聞

作 成:小金井史談会
編集責任:閑野寿幸